オピニオン　O P I N I O N

原爆投下・ソ連の対日参戦とポツダム宣言受諾

三好永作

はじめに

本誌の2011年8月号の特集に掲載された枯葉剤問題についての中村論文[1]と戦略爆撃についての前田論文[2]はどちらも大変な力作であり，多くのことを学ばせていただいた．

中村論文は，ベトナム戦争で米軍により多用された枯葉剤の問題は決して過去の問題ではなく，特に補償については，現在進行中の問題であると指摘する．さらに，1960年代に沖縄本島での枯葉剤散布を米国政府が認めているにもかかわらず，その問題に蓋をする日本政府の姿勢を告発している．

前田論文は，日本軍による重慶爆撃に学んだ米国が戦略爆撃機を開発し，日本，朝鮮北部（朝鮮戦争），北ベトナム（ベトナム戦争）で「空からの皆殺し作戦」を展開した戦略爆撃の歴史を包括的にレビューしている．さらに最近の無人機による特定目標の狙い撃ち攻撃は，別のかたちのテロリズムであり，野蛮な時代への立ち返りと断言する．

しかし，この2編とも日本の敗戦が原爆投下によってなされたというような記述があり，この点で少し違和感を持った．中村論文では，「広島，長崎へと原爆が落とされ，日本は降伏した」とある．因果関係を明確に述べてはいないが，原爆投下が日本の降伏の主要因とする表現と考えられる．前田論文では，「広島と長崎に立ちのぼった原爆きのこ雲を最後に，第二次世界大戦は終結した」とし，さらに，ブリタニカ国際百科事典の「核を用いて爆撃しないかぎり戦略爆撃では敵国を屈伏させることはできないというのが，今日では定説となっている」という記述を引用して，日本の第二次世界大戦における敗戦がその例であるとしている．

原爆投下が第二次世界大戦における日本降伏の主要因であったというこれらの見方は，米国の「原爆投下が日本の敗戦を早め百万人の命を救った」という言い分と，原爆投下が戦争を終了させたという点では，軌を一にするものである．

以前から，原爆投下が戦争を終わらせたという見方に疑問を抱いていたこともあり，原爆投下をめぐる問題をここで論じてみたい．

1　原爆投下の目的は何か

前田論文が指摘するように，米軍による東京大空襲や広島・長崎への原爆投下の要因の一つが，1940～1941年の218回にもおよぶ日本軍による重慶爆撃であったことは間違いない．

もちろん，原爆投下の主要因を特定することはそれほど簡単なことではなく，政治史や歴史学上の重要な課題の一つであろう．一般的にいわれていることは，(1) 米軍の犠牲を少なくして日本を早期に降伏させるため（人命救助説），(2) 米英ソのヤルタ会談で決められていたソ連の対日参戦前に原爆投下し，戦後の対ソ戦略において米国が優位に立つため（戦後の対ソ戦略説），(3) マンハッタン計画による原爆開発で使われた膨大な費用の国内向け正当化のため，(4) 有色人種に対する蔑視・偏見，(5) 原爆の人体実験，などである．これらの中で (1) 人命救助説と (2) 戦後の対ソ戦略説以外は，副次的な理由であるように思われる．

(1) の人命救助説は何の予備知識もない人にとっては受け入れやすい考えであり，(2) の戦後の対ソ戦略説はある意味では穿った見方である．人命救助説を原爆投下の主要因とするには，当時の対日戦の責任者がその必要性を認めてい

たことが前提となるべきであろう．しかし，その責任者アイゼンハワー将軍は，対日戦の勝利には原爆の使用は不必要であるとトルーマン大統領に進言している．同将軍以外の米軍軍人の多くも原爆使用は必要ないと述べている．

このことは，(1) の人命救助説が原爆投下の主要因であるという論拠の危うさを物語っていると同時に，(2) の戦後の対ソ戦略を睨んでの政治的判断があったことの確かさを示唆するものと考えられるが，ここではこの点にはこれ以上触れないでおく．ただ，一点だけ指摘しておきたいのは，後でみるように，米軍の戦死者を減らすためヤルタ会談において要請していたソ連の対日参戦の影響を減少させる政治的判断が原爆投下の重要な要因の一つであるということである．

2　原爆投下は日本の支配層にどう影響したか

次に，原爆投下が当時の日本の支配層にポツダム宣言受諾を決意させた主要因であるかを考えてみる．1945 年当時の日本の支配層の最大の関心事が「国体護持（天皇制の存続）」であったことは明らかである．日本の支配層は，この国体護持ということに関しては，主戦派も和平派も一致していた．軍部を中心とした主戦派は，国体護持のためには本土決戦を含む戦いで有利な状況を作る必要があると考えていた一方で，宮中グループなどの和平派は，ポツダム宣言を受諾しても国体護持が可能と考えており，ポツダム宣言を天皇制維持の条件にして受諾しようとしていた．

ポツダム宣言は，米英ソの合意で作られたものであったが，蒋介石の同意を得て，米英中の署名で宣言され，日本に対して無条件降伏を求めたものであった．ポツダム宣言で明記されていない天皇制の問題に対する対応が主戦派と和平派の主な違いであった．そのため，主戦派を含めた日本の支配層の多くは，ポツダム宣言受諾の条件に，ソ連を仲介役として，天皇制維持を確保しようとしていた．8 月の初めに，彼らが待ち望んでいたのは，ソ連に和平を仲介役してしてもらうために，近衛文麿を中心とした特使派遣し申込みに対するソ連側の回答であった．

天皇制維持が最大関心事である日本の支配層に対して，8 月 6 日の広島への原爆投下はほとんど影響を与えなかった．広島に落とされた爆弾が原子爆弾であることが明らかになった段階で，防空総本部は，対策として，待避壕に入ること，衣服で体を被い手袋を着用することなど，戦争継続の意志を示している．また，陸海軍も，「原子爆弾に対する防衛策も指示する事もなしに原子爆弾の出現を報道すると，国民に対し非常な衝撃を与え，戦意を失わせるから不利である」と軍隊として戦意を喪失した様子は見えない．

しかし，8 月 9 日零時（ザバイカル時間）に仲介役として期待していたソ連が対日参戦したことで，日本の支配層は天皇制維持が危機に瀕したことを悟ることになる．戦後処理に共産主義のソ連が発言力を増せば，天皇制の存続がほぼ絶望的であることは明らかであった．原爆投下では和平派の終戦工作は活発化しなかったが，ソ連の対日参戦の報を聞いた和平派の近衛文麿は，軍部を中心とする主戦派を押さえるためにはこれは「天佑であるかもしれん」と考えたという．和平の仲介役として一縷の望みを抱いていたソ連の対日参戦は，当時の日本の主戦派を中心とした支配層には計り知れない衝撃を与えることになった．

8 月 9 日午前 11 時前から最高戦争指導会議が開かれることになったが，ここでは主戦派も和平派もポツダム宣言受諾では一致しており，条件を天皇制維持のみにするか別の条件を加味するかが主な論点となっていた．主戦派の主張は，この最高戦争指導会議が始まる段階で，戦争の継続から，いくつかの条件を付けたうえでのポツダム宣言受諾に変わっていたのである．この会議の始まった直後 11 時 2 分に長崎にプルトニウム爆弾が落とされた．その報告が届いたのは議論伯仲のときであったが，重要なことは，長崎に原爆を落とされて，主戦派が徹底抗戦を諦めたのではなく，その前に態度が決められていたという点である．

このような経過を見ると，ソ連の対日参戦と原爆投下のどちらがポツダム宣言受諾という日本の降伏を早めたかについては，ケタ違いに前者の重要性が浮き彫りになる．また，ソ連の対日参戦は，ヤルタ会談において，米軍の戦死者を減らすために千島列島をソ連に渡すことなどを条件に，ルーズベルトがスターリンに要請したものである．

そのソ連の対日参戦の影響を最小限にするために，米国は原爆投下を政治的に判断し実行した．しかし，原爆投下は日本の支配層にほとんど影響を与えず，ソ連の対日参戦が日本の支配層にポツダム宣言受諾を決意させた主要な要因であったということは，歴史の皮肉である．

おわりに

①原爆投下 → ポツダム宣言受諾（日本降伏）
②ソ連参戦 → ポツダム宣言受諾（日本降伏）

日本降伏に関して，スキーム①はトルーマン大統領やバーンズ国務長官の思い描いたものであったが，スキーム②が日本の支配層にとって決定的であったということは，最近の歴史学の上では常識となっていることであると思われる．

古くは西嶋氏の名著[3]があり，最近では，長谷川氏（カリフォルニア大サンタバーバラ校）の労作[4]がある．しかし，このような歴史学や政治史における常識が，日本においてあまり一般に広まっておらず，定着していないようにみえる．

数年前，当時の久間防衛大臣が広島・長崎への原爆投下は「しょうがない」と発言して辞任に追い込まれたことがあった．その直後に，米国政府高官が「原爆の使用が終戦をもたらし，何百万人もの日本人の命を救った」と発言した．この発言に対して，当時の政府首脳や，与党だけでなく野党の政治家も，ほとんど無反応であった．訳知り顔の人びとも「別に目新しさはない」と無視した．久間防衛大臣を批判したような人もこの米国政府高官の発言に対して沈黙していたように覚えている．

被爆国日本の指導者や政治家が原爆使用に対する根拠のない正当化に抗議や批判をしないで，誰が批判するのだとの思いで，私はその無反応や無視に対して非常に苛立ったことを思い出す．

原爆投下の政治的な意図や原爆投下が敗戦当時の日本の支配層にほとんど影響を与えなかったことが，日本国民に共通の認識として周知されていれば，先ほどの米国政府高官の発言に対する反応は違ったものになっていただろうと想像する．

政治史や歴史学の専門家に，原爆投下の意図や原爆投下がポツダム宣言受諾（日本降伏）においてほとんど影響を与えなかったということを，すべての国民が理解できるような分かりやすい文章で解説してくれることを望みたい．専門書のような難しいものではなく，できれば絵本やマンガなど，誰でも手軽に読めるような出版物であれば申し分ない．

そのような書物をとおして，日本の老若男女が，原爆投下についての意味を深く理解することは重要である．そうすれば，核兵器廃絶への運動が現在のレベルより一段高いレベルに達していくのではないかと，私は想像をさらに拡げる．

原爆投下による広島・長崎の犠牲者は，戦争の犠牲者というよりは，米国の戦後政治を睨んでの対ソ戦略上の政治的判断による原爆使用の犠牲者なのである．このような原爆使用が許されていいはずがない．私は，戦争終結のための原爆使用なら許されるかということを問題にしているのではない．政治的判断による原爆使用は，二重三重に許されないということを言っているのである．

謝辞：本稿は，西嶋有厚氏に目を通していただいた．改めてここに謝意を表したい．

引用文献

1) 中村梧郎「枯葉剤散布は核兵器と同様の悲劇をもたらす―第二次世界大戦末期にも対日枯葉作戦計画があった」『日本の科学者』**46** (8) , 4-9 (2011).
2) 前田哲男「戦略爆撃の実相―大量虐殺とその非人道性」『日本の科学者』**46** (8) , 17-23 (2011).
3) 西嶋有厚『原爆はなぜ投下されたか―日本降伏をめぐる戦略と外交』（青木書店 , 1968).
4) 長谷川 毅『暗闘―スターリン, トルーマンと日本降伏』(中央公論新社 , 2006).

（**みよし・えいさく**：九州大学名誉教授）